

## 第5回事故調査・検証委員会 畑村委員長記者会見

日時：平成23年11月29日(火)17:30～

場所：大手町JAビルカンファレンス401会議室

本日、東京電力の福島原子力発電所における事故調査・検証委員会の第5回の会合を開催しました。

本日の会合では、次回12月26日の会合で取りまとめをする、中間報告のドラフトについて討議をしました。

ドラフトのうち、事実関係の部分は、これまでの調査結果や、委員・技術顧問の意見を基に、事務局に作業をしてもらいました。委員会としての評価の部分は、委員と技術顧問で構成するワーキンググループにおいて直接執筆を致しました。

今後、本日の会合での議論を踏まえ、更に、各委員・技術顧問と意見の参照を行いつつ、ドラフトの修正作業を行う予定です。

事実関係、更には委員会としての評価を、中間報告でどこまで踏み込んで書くかについては、本日の会合でもいろいろな意見がありました。

まだ、調査の途中段階であり、事故対処に関する意思決定に関わった、当時の閣僚のヒアリングも未了の状態です。したがって、中間報告でどこまでのことを書けるのかは、今後、慎重に詰めていかなければなりません。

しかし、委員会の議論の大きな方向性は、「中間報告で書けることはできるだけ書く」ということです。

ですから、中間報告は、かなりの分量のものになると思います。

次に、大熊町、双葉町の町長からの意見聴取についてお話しします。

少し前の話になってしまいますが、11月9日に、委員長である私、委員長代理の柳田委員、それに、高野委員、古川委員、吉岡委員で、福島第一原発の立地自治体である大熊町、双葉町の町長と面談し、意見などを伺いました。

これについての感想というかですね、そういうのを幾つか言ってみたいと思います。

双葉町は、埼玉県の加須市に町中で移動して来られました。大熊町は、会津若松です。その両方に出かけて行って、色々な話を伺ったのですが、一番強く感じたのは、当たり前前に生活をして、みんなで活動しているところが、突然に、ほとんど理不尽な形で追い立てられて、移動せざるを得なくなってしまった。そういうことの苦しみというような、そういうものを非常に強く感じました。

それからですね、どちらの町長さんに会っても同じ印象を持ったのですが、本当にああいう事故が起こったときの十分な連絡ですね、自分たちが、今、何が起こつ

ているのか、それからどういう方向にどう行動すればいいのか、それから、これから先、どっちの向きにどう考えればいいのか、そういう情報が、ほとんど全くと言っていい程、来なかった、という話です。

それで、これはですね、そんなことがあってはいけないという風に思うのですが、突然に追い立てられるのに、理由も分からず、それから、本来、どっちの向きに逃げなければいけないのか、ということすら、きちんとそれが伝わってなくて、ある方向に動いていったら、「そっちは駄目だから、また、こっちに移れ」というようなことを言われて、どちらかという、翻弄されているという、そういう印象を受けました。

それから、別のことはですね、「どのくらい備えがあったか」ということについて、ほとんど備えが無かったように感じるということ言われておられます。

それは、例えば、政府というか、国というか、そういう所の備えも無いし、東京電力の備えも無いし、それから、地方の自治体として、そういうものをどう動いたり、連携をとったりしなきゃいけないとか、そういうものが全然無かったように思うという、そういう印象をどちらも言っておられました。

それからですね、僕らにとってみると、今、十分な備えがあったかどうかのとおりなんです、訓練をするというようなことが、非常に大事だと考えていたのに、それまでやっていた訓練のようなものが、ほとんど役に立たなかったと、これは、訓練そのものが形式的なものになっていて、それで、ただ形ばかりのもので、最後は、「はい。ご苦労さんでした。」というので終わってしまうような、形だけの訓練になっていたというのを非常に強く感じるということ言っておられました。

それからですね、言っておられたのは、いわゆる安全神話というか、「原子力は安全なんだ」という前提に立って、全部が動いていることの、おかしさのようなものを、とても強く感じるということ言っておられました。

それから、その次、ちょっと話は違いますが、いつ、本当に元の場所に帰れるのか、それから、いつ頃、どんな風にちゃんとそういうことが出来るのかというのが、全く、示されないし、分からないし、それは自治体の長として分からないでいるから困るということ。それよりも、そこに住んでいる住民自身が、もう、全くどうすればいいのか、分からない形で、いま、迷っているとか、困っている、そういう言葉で言えない感じですね。

とにかく、ほとんど理不尽に先も見えない、何も見えない、どうにも自分たちの手では、何か下すことが出来ないような、そういう場所に置かれていて、しかも先が分からない状態という、ものすごくつらい、そういう場所に置かれているんだ、ということ言っておられました。

僕たちは、原発の事故が、どんな風な影響を与えているかを、お聞きしに行った訳ですが、それまではですね、事故調査・検証委員会でやっているのは、どんな経過で事故が起こっていったのか、放射性物質がどんな風に外に排出され、風に乗って行くのかとか、津波がどんな風に来たからとか、そういう方向から、僕らは最初は考えていたのですが、この事故の一番、本質部分は、何故起こったか、どうな風が起こったか、どうして起こったかというよりも、ものすごく沢山の数の人が、ほとんど理不尽に、それまでやって来たものを、突然、止められて、その場所から追い出さ

れてしまって、もう、帰ることが出来ない状態に居る。こっの方が、はるかに重きを置いて考えないといけないことだなという風に感じました。

これ、時間とともに、色んなものが変わって行く訳ですが、この事故の一番大きい所は、いま言った、ただ放射性物質がどうなっているとか、そういうこととは違って、生活そのものが全部奪われてしまったという、そういう人たちのことを考えなきゃいけないんだな、ということ非常に強く感じました。

大体、それで感じたこととかいうのは、そういうところですよ。

それでは、今は町長さんにお会いした話ですが、それ以外のことについて、海外専門家のことについて、お話しします。

今回の事故の調査・検証について、海外の専門家の意見を聴くことになっています。

前回の記者会見で、アメリカ、フランス、スウェーデンの専門家を発表しましたが、韓国の専門家についても内諾が得られました。

配布したペーパーに記載のとおり、チャン・スンフン氏。韓国科学技術院の教授、韓国原子力協会の会長です。この方をお願いすることになりました。

現在、近隣国の専門家について、更に若干名の人選を進めているところです。